

2012年中(暦年)のご寄付者のみなさまへ

あしなが育英会

会長 玉井義臣

「受領証明書」ご送付と事業報告ならびにお願い

遺児奨学生から初の大臣誕生
東日本大地震・津波遺児への特別一時金給付2073人に
東北レインボーハウス建設 陸前高田・石巻で着工
世界ファンドレイジング大賞を受賞

寒い日が続いております。東日本大震災によって被災された方々に謹んで心よりお見舞い申し上げます。

ご支援者のみなさまにおかれましてはお変わりございませんか。あしなが育英会では2011年3月の東日本大地震・大津波発生以来、国内外から多くのご支援をいただき、津波遺児2073人に一人200万円の一時金の給付とこの1月には東北レインボーハウス建設に着手することができました。また、震災を機に多くの方が「あしながさん」となってくださり、遺児たちを支えてくださっています。心より厚く御礼申し上げます。

さらに年末の総選挙を経て発足した新内閣では初の遺児奨学生出身の大臣が誕生し、遺児を含む貧困状態にあるすべての子どもたちの教育環境が改善されることをおおいに期待しております。これもひとえにみなさまのご支援の賜と重ねてお礼申し上げます。

以下、2012年(暦年1月1日～12月31日)に起きた本会のトピックや、注目していただきたい事柄をお知らせ申し上げます。

遺児奨学生から初の大臣誕生 下村博文さん 文部科学大臣に就任

昨年末、総選挙があり、40余年のあしなが運動の中で初めて、交通遺児の第1期高校奨学生で、大学奨学生2期生の下村博文さん(58)が、長年の政治活動の成果が認められ、昨年12月26日発足の第二次安倍晋三内閣で、見事「文部科学大臣」に就任されました。

私玉井と彼は学生時代からよく知る仲で、政界進出、落選を経て都議当選を果たし、ついに国政に進出。第一次安倍内閣では「勝手連」をつくって安倍総理実現の推進役となり、内閣官房副長官という首相への登竜門といわれる重職を得ました。

2009年7月の総選挙では自民党が大敗し、東京の自民党は小選挙区ではベテラン惨敗、当選した議員は下村さんから4人しか残らず、比例復活で大物議員はようやく残るという有様で、下村さんは東京都の自民党議員内の順位を上げ、党の政務調査会副会長に就任しました。このたびの総選挙では民主党が惨敗し、自民党も下村さんも大量得票で、自民党は第一党となり、下村博文さんは、あしなが遺児奨学生としては初めての大臣として、文部科学大臣に就任しました。下村さんは小学生のとき、お父さん(当時38歳)を交通事故で亡くし、お母さんの実家に戻りましたが、生活保護を拒み、極貧の中で博文さんと弟2人は育ちました。1個の生卵を3兄弟で分けてご飯にかけて飢えをしのぐ極貧の生活をしました。それでも高校は名門県立高崎高校、大学は早稲田大学教育学部に入り、明治以来多くの政治家を輩出した雄弁会で幹事長まで務めました。貧乏を憎み、地域社会の冷たさも感じながら、小学校の3年生のとき貧しい人びとの味方になろうと考え、ある夜、父の墓前に誓いを立てました。

少年ながら将来の目標を立て、極貧の中でくじけもせず、遂に念願の文部科学大臣になったのです。彼の後輩たちはいま9万人にも達します。数十万のあしながさんと共に、遺児の奨学金の制度をはじめた奨学生の中から遂に第1号の大臣、文部科学大臣が誕生したことを喜び、彼のためにあしながファミリーで祝ってあげたいと思います。貧困の中にあっても高い志をもって、WORK HARD(一生懸命勉強する、働く)を続け、世のため人のためを考え、志をさらに高くもってますますWORK HARDしてほしいと思います。君の道は宰相にもつながる。君の道の後には無数の後輩たちが切れ目なく続く。遺児だけではなく多くの若者たちが、未来永劫に続く。「教育の道」を時代を超えたものに創っていくのが下村博文君、あなたのミッションです。国家百年の計は教育にあり、私(78歳)も海外遺児への教育支援を天職として死ぬまで続けていきます。

2012年(暦年)の「受領証明書」をお届けいたします

さて、2012年1月1日から12月31日までのあなたさまからのご寄付の「受領証明書」をお送りいたします。昨年は、東日本大地震・津波の影響が大きかった前年の2011年に比べ、33.7%減の58億8379万456円でしたが、寄付件数では16%増の454,826件となりました。また、日本だけでなく、海外からのご寄付額は通常の3倍以上でした。

それでは、ここで2012年中にみなさまからいただきましたご寄付についてご報告いたします。

2012年の寄付種別と寄付額のご報告

2012年中にみなさまから寄せられましたご寄付額(2012年1月～12月)は次の通りです。

・あしながさん奨学金	13億6080万6061円	(昨年比 105.3%)
・用途を限定しない一般寄付	12億4317万1323円	(昨年比 128.5%)
・虹のかけはしさん	1億2680万0873円	(昨年比 114.5%)
・海外遺児支援	12億6903万5770円	(昨年比 88.9%)
・その他	2459万2693円	(昨年比 43.2%)
小計	30億2440万6720円	(昨年比 110.8%)
・東日本大地震・津波遺児募金	12億9809万1876円	(昨年比 29.2%)
・東北レインボーハウス建設募金	15億6129万1860円	(昨年比 92.0%)
小計	28億5938万3736円	(昨年比 46.6%)
合計	58億8379万0456円	(昨年比 66.3%)

(注1) 「その他」の内訳：①ファイトがん遺児育英募金4,677,057円、②あしながレインボーハウス募金1,248,137円、③学生寮「あしなが心塾」2,721,660円、④ウガンダ虹のかけはし会員10,265,563円、⑤アフリカ遺児教育支援5,680,276円

(注2) なお、2012年度の「あしなが学生募金」は2億9260万5447円(1月24日現在)、「あしながPウォーク10」は1092万7253円(1月24日現在)となっております。

みなさまにとって最も大きな関心事と思われる東日本大地震・津波遺児募金について付記します。

東日本大地震・津波遺児支援へのご寄付についてのご報告

①特別一時金の給付について

2011年3月11日の東日本大地震・津波から1年9か月がたちました。本会は震災の2日後に、津波遺児への特別一時金の給付を決定。奨学金の貸与、心のケアのための活動費用と合わせて、「あしなが東日本大地震・津波遺児募金」を行ってまいりました。これまでに、国内の個人約16万件、企業団体1万5千件に加え、世界30か国から約600件のご支援が寄せられ、募金額は2012年12月末現在57億4161万6321円(17万6972件)となりました。

いただきましたご寄付から「特別一時金」として①未就学児②小中学生③高校生④大学・専修・大学院生の遺児2073人に一律200万円、合計41億4600万円を給付いたしました。

当初、申請の受付期限を2012年9月末としておりましたが、震災関連死による遺児からの申請が続いているため、期限を2013年3月末まで延長いたしました。なお、一時金の申請受付終了後のご寄付残高の給付につきましては、諸般の状況を考え、3月末までには全額を配分する予定です。

②東北レインボーハウス建設について

また、本会では経済的な支援と併せて津波遺児への心のケアにも力を注いでまいりました。阪神淡路大震災後に神戸に“心を癒す家”レインボーハウスを建設し、17年来子どもたちを支えてきた経験から、東北にも「東北レインボーハウス」を建設することを決定いたしました。「あしなが東北レインボーハウス建設募金」として、宮城県、岩手県、福島県に5か所のレインボーハウスを建設することを目指してまいりました。その結果、これまでに仙台市、

石巻市、陸前高田市の3か所について具体的な土地が決まり、32億円の費用が概算として計上されております。まずは、この3か所の建設を進めてまいります。また、岩手県北部の津波遺児家庭から、強く要望をいただいている大槌町・山田町地域のサテライト建設につきましても、引き続き実現を目指してまいります。12月末時点で、募金額は約32億6千万円（約3万2千件）となりました。

①あしなが東日本大地震・津波遺児募金 収支報告

【収入】2011年3月11日～2012年12月31日

	金額(単位:円)	件数(単位:件)
2011年3月11日～2011年12月31日	4,443,524,445	83,970
2012年1月1日～2012年12月31日	1,298,091,876	93,002
寄付金合計	5,741,616,321	176,972

【支出】2011年3月11日～2012年12月31日

項目/内容	支出済額(単位:円)	備考
特別養育一時金(未就学児童)	592,000,000	1人200万円を296人に給付
特別就学一時金(小中学生)	1,946,000,000	1人200万円を973人に給付
特別奨学一時金 (高校・大学・専修各種学校・大学院生)	1,608,000,000	1人200万円を804人に給付
合計	4,146,000,000	

【残高】2012年12月31日時点

1,595,616,321円

②あしなが東北レインボーハウス建設募金 収支報告

【収入】2011年3月11日～2012年12月31日

	金額(単位:円)	件数(単位:件)
2011年3月11日～2011年12月31日	1,697,698,830	10,027
2012年1月1日～2012年12月31日	1,561,291,860	22,502
寄付金合計	3,258,990,690	32,529

【支出予定】仙台・石巻・陸前高田

項目/内容	支出予定額(単位:円)	備考
東北レインボーハウス(仙台)	1,300,000,000	土地、建物、家具、設計費他
石巻サテライトレインボーハウス	600,000,000	土地、建物、家具、設計費他
陸前高田サテライトレインボーハウス	500,000,000	借地代(20年分)、建物、家具、設計費他
上記3か所の運営費	800,000,000	ランニング、メンテナンスコスト及び運営費
合計	3,200,000,000	

【残額】2012年12月31日時点

3,258,990,690円

繰り返しになりますが、東日本大震災当時、私玉井はウガンダ出張中でした。首都カンパラに着いてホテルに入り、トランクを開け、テレビをつけた数分後に経済市況から大津波の“実況”が入り、それも母国ニッポンの大地震だったので、肝をつぶしました。

東京の本部事務所から吉田事務局長の電話で「会長、すぐに帰って陣頭指揮をとってほしい」というので、翌日の一番の飛行機を押さえました。機中で寝ずに私は考えました。テレビで、“着の身着のまま”の子どもの姿を見たとき、瞬間的に私たちの奨学金貸与では今の役には立たない。今必要なのは、何に使ってもかまわない“使途自由”、さらに返さなくてもよい“返済不要”の生活一時金だ。ご寄付を募り、これを被災者のために役立てたいと思い、特別一時金給付制度がスピード感をもってできたのです。私は東京に帰ってすぐに本部に直行し、各副会長や弁護士らと相談して、震災の発生後2日目の夜、救済プランを決定。翌3月14日に発表しました。

津波遺児たちにこの制度を知ってもらうため、1か月後の4月11日に東北事務所を設置。職員と学生からなる5つのお知らせチームで人びとが避難している学校や公民館など約800か所をまわって、ポスターを貼り、呼びかけました。その努力が実って、続々と津波遺児や保護者の方々が名乗り出てくださったのです。

ここで2つの点に注目してください。被災者の方々のことを考えると一刻の猶予もなく、時間限定であること。

もう一つは国や公益法人では会議会議で書類を山のようにつくり、ハンコを担当からトップまでついてまわり、決定するまでに数日、十数日、1か月はかかってしまうことです。そして政府の許可を得るのにさらに何日もかかるのが常識です。この間、“着の身着のままの子”はどうすればいいのか。スピードある救済策が求められていたにちがひありません。何か月経っても義援金、寄付金は配られ始めることもなく金庫に眠っているという状態に、寄付者はいらだちました。

赤十字に代表される公的機関や政府公認の公益団体と本会とではアクションが大きく違っていたことを国民は知るところとなりました。しかし、制度だけの問題ではないように思います。民間の仕事のスピード感と働く時間の方が、役所的なところより速く濃密なのではないでしょうか。それは何よりも、今一刻も早くやらねばという側隠の情であり、ボランティアの本質だったのです。私はそう思います。法律や役所のしきたりより、私たちNGO（非政府組織）は心と体がそう動くのだと思っております。

遺児救済 草創の歴史

“遺児奨学生の大団長第1号” 下村博文さんは文部科学大臣に就任、活躍してくれるでしょう。しかし、遺児救済の草創期、遺児奨学金ができる前に活躍した学生や若者たちのことを忘れることはできません。

遺児救済運動が始まったのは、一つの原点を求めるなら、ちょうど50年前、私玉井の母が交通事故に遭い、1か月余りの昏睡の後亡くなったその枕頭にあつて、交通被害者を取り巻く行政の立ち遅れを①救急医療体制の不備と対策、②低い被害者への補償を裁判、保険の制度から告発、③事故被害者の刑罰のあまりの低さ（刑法11条改正）を適正化することを1965年に朝日ジャーナルに3本の論文で訴え、マスメディアの大きなキャンペーンで改正に向かう・・・など交通評論家として活動し、高い評価を受けました。励ます会、学生募金ら学生の活躍が運動を推進しました。しかし、高度経済成長のバブルがはじけて「失われた20年」を経て、日本経済は今ゆるやかに凋落の道をたどっているといわれています。アベノミクスでは国債暴落、ハイパーインフレの危険性ははらんでいるのは否めないと思います。

一方で、岡嶋信治さんは1961年、高3のとき、親代わりの姉を酔っ払いトラックに奪われ、その悲しみをすぐ朝日新聞「声」欄に投稿。これに対して130通以上の励ましの手紙が傷心の彼を慰め、励ましました。彼はその一人ひとりに返事を書き、文通が始まりました。徐々に岡嶋さんの心は癒されていきますが、1967年4月、岡嶋さんは今度は僕が癒す役割をと、やはり朝日新聞に投稿し、「交通事故遺児を励ます会」を16人の若者で結成します。活動するには遺児の名簿が必要で、学校、交通安全協会などに調査を依頼しますがゼロ回答で、数か月後、会員は半減し、岡嶋さんは、アフタヌーンショーにレギュラー出演していた私玉井に「一緒にやってほしい」と助勢を求めに來られたので、その迫力に押されて即座にOKしました。これが私が遺児の奨学金事業に入った動機で、これがなければ、この事業はスタートすることもなかったでしょう。二人の交通犠牲者が握手して、遺児救済事業が始まったのは、1967年7月と言えます。

その後、岡嶋さんの「励ます会」は1967年10月22日、遺児のために日本初の募金を始めます。8日間、1日8時間、東京数寄屋橋と池袋の2か所です。募金額は30万4999円でした。これが先日、私が世界ファンディング大賞をアムステルダムで受賞する理由の一つになった「900億円を集め、9万人の遺児を進学させた」とある、900億円の種銭（たねせん）になったのです。始まりはゼロに近いところからスタートしたのです。

広島大自動車部から生まれた「広島励ます会」代表であった、藤村修さんは大学2年のとき、玉井の訪問を受け「天国にいるおとうさま」を読まれ、ドライバーとして遺児のことを痛感し、玉井らの運動に加わり、玉井の同志となり、卒業後、玉井が主宰する育英会に就職。後に独立し、玉井と共に日本ブラジル交流協会をつくり、25年間に750人の学生をブラジルに1年間留学研修させました。1993年、玉井からの勧めもあって、山本孝史さん（運動の同志）と共に日本新党から選挙に出てトップ当選。19年目に、野田内閣の官房長官として482日を無事に務めました。今回の総選挙で民主党は大敗を喫し、藤村長官も下野。いつの日か古巣のあしなが育英会に戻り、20年の政治生活の経験を活かして、念願だったボランティアの世界に入ってほしいものです。

長い報告になりましたが、紙数も尽きましたのでこの辺でペンをおきます。

「あしながアフリカ遺児教育支援100年構想」は機関紙で度々ご紹介しておりますので、またの機会に譲りますが、準備は着々と進んでいることを申し添えます。実施にはまだ両三年かかると思われます。

天候不順の折柄、皆みなさまにはくれぐれもご健勝であられますことをお祈りし、感謝のご報告にかえさせていただきます。